いわき市教育委員会

研修だより　礎（いしずえ）

研修だより　第19号
平成31年3月7日
発行所
いわき市教育委員会
発行責任者
教育長　吉田　尚

社会への架け橋としての学校教育
～「志」を育てる ～

いわき市教育委員会学校教育推進室
学校教育課長　玉澤　淳

あるテレビ番組でOriHime（オリヒメ）というロボットの存在を知った。OriHime（オリヒメ）は人工知能を持たず、動かすのは人間である。行きたいところへ行けない人にとっての「もう一つの身体」、「分身」となるのがOriHime（オリヒメ）である。OriHime（オリヒメ）に搭載されたカメラ、マイク、スピーカーを通して、遠く離れた場所にいる家族や友人と、まるで一緒にいるようにコミュニケーションをとることができる。病気の療養や身体的問題で外出できない人など、さまざまなニーズから利用者が増えているという。

OriHime（オリヒメ）の開発者は、吉藤健太朗という青年である。「人間の孤独を解消する」という壮大な志を掲げ、ロボット開発に没頭してきた。そんな彼の原点は、11歳から3年半に及ぶ不登校による孤独の体験にあるという。その頃、欲しかったがなかったものを作るために、彼はロボット開発者になった。今、OriHime（オリヒメ）は、多くの人々の社会参画を促し、孤独を癒している。必要としてくれる人がいることの自覚が、ロボット開発者としての彼の原動力となってきた。「必要としてくれる人がいる限り、生きていける。」と彼は言う。

彼の行動・言葉から、「志」の本質について考えさせられる。「志」は、私欲に基づく個人的願望とは異なり、自分ではない誰か、何かとの関わりによってもたらされるものである。

第二次大戦時のナチス強制収容所における極限の体験を綴った「夜と霧」の中で、著者ヴィクトール・フランクルは自殺を思いとどまった二人のエピソードを紹介し、「自分を待っている仕事や愛する人間に対する責任を自覚した人間は、生きることから降りられない。」と記している。

他者や社会との関わりから生まれた使命感、責任感、思い（「志」とも言える）は、人を強く突き動かす力の源となり得るものだと私は考える。

「キャリア教育」の重要性が公的に提唱され、20年近くにもなるが、国際調査の結果からは、日本の子どもたちは、「自分の判断や行動がよりよい社会づくりにつながるという意識を持てていない」ことが、未だ課題として指摘されている。

現在、学校は「社会に開かれた教育課程」の実現が求めれている。様々な人々と関わりながら学び、その学びを通じて、自分の存在が認められることや、自分の活動によって何かを変えたり、社会をよりよくしたりできることの実感を持たせることが重要である。こうした学びの積み重ねが、子どもたちの主体性を育て、学んだことを人生や社会づくりに生かそうとする態度を醸成する。

本市における「いわき志塾」やElem（エリム）での体験型経済教育の取り組みは、創設以来5年になる。今後さらに、市教委と各小中学校で、キャリア教育本来の理念に立ち返った理解を共有し、市を挙げてキャリア教育の充実を図りたい。

視点A Activity 様々な体験活動・学習支援活動の推進

防災サマーキャンプ

1　研修のねらい

社会教育施設等での研修により、社会人としての常識や幅広い識見を養い、学校とは異なる業務の中で防災や社会教育への意識を学び、教員としての資質の向上を図る。

2　研修の実際

事業へ参加した初任者の先生に研修について伺いました。

防災サマーキャンプに参加して

湯本第一小学校　菅野　亜季 先生

防災サマーキャンプでは、災害時の行動をゲーム形式で体験的に学ぶことができ、子どもたちは夢中になって活動していました。実際に身体を動かしたり、班の友達と活発に意見を交わし合ったりすることで、公民館や消防署の方々に教えていただいたことが、子どもたちの生きた知識になっていく様子が見られました。いつもと異なる環境で、初めて出会う友だちと協力して生活・活動することは、子どもたちにとって乗り越える壁にもなっていました。しかし、子ども同士がコミュニケーションをとりながら様々なことを体験して学んでいく経験は、災害時だけではない「生きる力」を育むためにも大切だと今回の防災サマーキャンプに参加して実感しました。今回の防災サマーキャンプで学んだことや感じたことをこれからの教育活動に生かしていきたいと思います。

養護教諭として思うこと

長倉小学校　関根　真衣 先生

防災サマーキャンプは、ビニール袋や雑誌を使った応急手当、毛布を使った担架、紙食器、バケツリレーなど災害時に子どもでもできる対応策を子どもたちがゲーム形式で学ぶ活動でした。グループでの話合いや体験活動を通して考えを深め、知識・技術を身に付けることができるため、実践しやすいと感じました。また、他の学校の友達と活動することで、災害時に集団の一員として役割を果たすことや協力して乗り越えることの大切さを実感できる場だとも思いました。

災害時、養護教諭には応急手当や環境衛生、心のケアなど多くの役割が求められます。迅速かつ適切に対応できるよう、日頃から準備をしていきたいと思います。

また、児童が自他の命を守るための行動や方法、考え、知識・技術が身に付くように保健指導を工夫していきたいです。

English Immersion Camp
（イングリッシュ・イマージョン・キャンプ）

1 研修のねらい

中学生を対象に実施していたイングリッシュ・イマージョンキャンプを本年度より次の２点を目的として、小学校５・６年生に広げて行いました。

(1) 外国語の活動を通して、外国語と日本語の違いやことばの豊かさに気付かせること。またコミュニケーション活動により、お互いを理解したり協力したりすることの大切さに気付かせること。

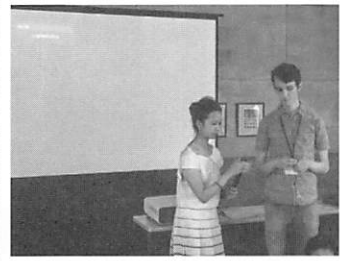
(2) オールイングリッシュのワークショップを通して、失敗を恐れずに英語によるコミュニケーションを楽しみ、チャレンジ精神や外国語への興味関心を高めさせること。

2　研修の実際

参加対象者は、外国語の文化や英語学習に興味がある小学校５・６年生で、ALT 等とのオールイングリッシュでのワークショップに挑戦しました。ALT が制作した迫力あるオープニングビデオから始まり、「メイキングマップ」や「メイキングパズル」、「伝言ゲーム」など、想像力や英語の発音を生かしたバラエティ豊かな活動が行われました。最初は控えめだった子どもたちが、徐々にコミュニケーションを自らとるようになり、最後には、積極的に活動していました。

3　参加者の感想から

「いろいろなゲームに取り組めてとても楽しかった」「もっと他の友達も EIC に参加してほしいと思った」「初めて会った人や ALT と楽しく活動できた」「オープニングのビデオがすごくワクワクした」「英語を話すことがとても楽しかった」「英語を話すことを通して、新しい友達を作ることができた」などの感想が子ども達から寄せられました。



視点B Base「主体的・対話的で 深い学び」に向けた授業改善

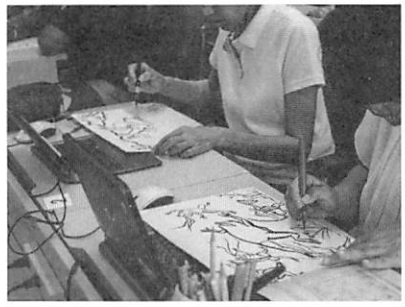
授業力向上講座Ⅱ
小学校図画工作科・中学校美術科

1　研修のねらい

新しい学習指導要領の総則では、「各教科等の特質を生かして情報活用能力等の資質・能力を育成する」ことが明記されています。これは図画工作科や美術科においても例外ではありません。パソコンは何度もやり直したり、構想の場面での様々な試行錯誤をするのにとても適しています。今回の講座では、発想・構想をふくらませる段階でパソコンを使った模擬授業を行いました。

2　研修の実際

みんなで自分たちだけの鳥獣戯画をつくろうという題材に取り組みました。発想を広げる段階でパーツを組み合わせるだけで完成する「鳥獣戯画制作キット」を使用しました。試行錯誤することにより思いがけない発想が生まれ、先生方は自分らしい表現を見つけることができました。完成した鳥獣戯画を印刷し、それをもとに新たな自分らしい表現を加えながら画用紙に下描きし、筆ペンで仕上げました。最後に全員の作品を横につなげて1つの作品にして鑑賞会を行いました。つなげることにより圧倒的なスケール感やストーリーが生まれ、先生方も楽しみながら鑑賞していました。



3　受講者の感想から

「苦手意識のあるパソコン操作だったが、自分の思いを自由に表現できる楽しさを体感することができた」「構想の段階にパソコンを導入するのはとても効果的だと実感した」「作品をつなげて鑑賞するのもとても楽しく、みなさんの作品を興味深く鑑賞することができた」などの感想が寄せられました。ぜひ図画工作科・美術科においてもICTを効果的に活用してみてください。

主体的・対話的で深い学びの実現
～授業のイノベーションと カリキュラム・マネジメント～

教育実践研究発表大会　田村学先生（國學院大學 人間開発学部初等教育学科教授）の講演から

「先生方は児童・生徒に思考を促す際に、『考えなさい、よく考えなさい、しっかり考えなさい』と指示を繰り返すタイプですか？それとも『思考ツール』を活用して思考を活性化させるタイプですか？」この質問に、皆さんはどうお答えになりますか。このような田村先生の問いかけやユーモアのある会話に、参加者はドキッとしたり笑顔がこぼれたり、時には大きく頷いたりしていました。また、参加者に直接マイクを向けて発言を促すなど、「アクティブ」な田村先生の講演に、参加者はみるみる前のめりになり、最後は「納得」「すっきり」といった「心地よい学び」へ導かれました。平成28年度まで文部科学省視学官を務め、今回の学習指導要領改訂にあたった田村先生のお話は、「深い学び」に向かう授業改善の方向性を明確に示していただけるものでした。

前半は、改訂の経緯について、国際的な動向やすでに始まっているＡＩの広がり等社会の変化に基づいて、丁寧に解説していただきました。

続いて「つなぐ･つなげる･つながる」をキーワードに､「深い学び」に至る「知識の構造化」について、子供たちの思考過程を構造化したモデルを映しながらお話しいただきました。

さらに、知識は活用することにより長期記憶になることや、授業中のリフレクションの重要性について、データや科学的根拠に基づいてご説明いただきました。

参加者も熱心な先生が多く、講演後も田村先生の出発時刻ぎりぎりまで質疑が寄せられました。

「『主体的・対話的で深い学び』は、学年が上がるほど、校種が上に行くほど効果的に進めることができるもので、全国の学校・教室でかなり授業改善が進んでいます」の言葉は参加者のみならず、いわき市の先生方すべてが意識し、実践していくものであると感じました。

視点Ｂ Base　教職員のライフステージにおける研修の充実

ミドルリーダー養成研修
～中堅教員から中核教員として～

１　研修の趣旨と実際

本研修は、「ミドルリーダーとして果たすべき指導的役割を再認識し、教職員の資質向上を図る」ことを目的として、本市教育委員会独自の基本研修の一つとして位置づけ、実施しています。

特に今年度は、「学校組織マネジメント」に関わる立場として、学校経営・運営ビジョンを見つめ、自校の課題から自己課題を設定することと、学校教育目標の具現のため、経営・運営ビジョンの具体策をどう立案していくかということを焦点化し、系統的に演習を行いました。

５月の全体研修では自校の学校経営・運営ビジョンを持参し、ＳＷＯＴ分析に基づいて各自の課題設定を行いました。９月の学校組織マネジメント講座では、事例校の学校経営・運営ビジョンをもとに、ブレインライティング、カテゴリー分類の手法を用いて達成のための具体策を策定しました。現状分析に基づいた課題設定・課題解決を段階的に実施し、学校経営参画のためのスキルアップにつながる研修を実施しました。

２　受講者の感想から

- 進んで学校運営に関わりたい。学校を見ていく力が必要であることを感じた。
- ミドルリーダーとして意見を集約し、発信する立場にあるので、今回の手法を活用したい。
- 話合いの進め方、話合いでできた方策が大変具体的であり、自校で活用できそうであった。

３　研修の成果及び今後の取組

研修で身に付けた手法を活用し、校内での会議や研修等がより主体的になるよう実践し、各校の指導的役割を果たしていただきたいと思います。平成31年度は校内研修に、伝達講習を実施する「研究推進研修」を位置づけ、より主体的・能動的な研修を目指して参ります。

管理職研修～教頭実務研修③
～「コーチングの技法を生かして」～

１　研修のねらい

管理職としての職務を理解し、学校教育全般に対する具体的な方策をもって教職員をリードする力量を身に付ける。

２　研修の実際

「学校教育課題解決に向けた教頭の役割」として、Weness Japan Coaching and Consulting 代表取締役 大野　宏 先生にコーチングの手法を学びました。研修の感想や研修後に実際に活かしたことなどについて、研修者に伺いました。

錦小学校　教頭　北原　貴泰 先生

よくスポーツ界ではコーチという言葉を耳にします。では「コーチング」とはなんだろうと、改めて調べてみたところ「人が本来持っている能力や可能性を最大限に引き出す対話」ということがわかりました。今回の研修では、対話という実践を繰り返しながら、「認知や傾聴」のスキルを学びました。校務においても、対話は必要不可欠なことを感じてはいましたが、改めてこの研修で重要性を再認識できました。特に「傾聴」については、自分では日々できているつもりでいましたが、「心で聴く」段階の技術が不足していることを知りました。これからさらにスキルを身に付けなければならないと感じました。

本校でも教頭として、さまざまな相談をいつ何時と受けます。それは生徒指導のことだったり、授業のことだったり…。その時はやはり、先生方の話を聴くことを心がけ、助言や賞賛、気配りの言葉かけを大切にしています。このような小さなコミュニケーションが人と人との信頼を生み、組織の基礎基本である「報告・連絡・相談」を迅速に行わせるのだと信じています。

これからも今回の研修を大いに生かし、良好な勤務環境と人間関係が醸成できるよう、日々謙虚な姿勢で学び続けたいと思います。

視点B Base　新学習指導要領の実施に向けて

道徳主任等研修
生涯学習プラザ

1　研修の趣旨と実際

本研修は、道徳の教科化に伴う課題解決（授業の在り方や評価など）に向けての研修を行い教員の実践的指導力の向上を図り、道徳教育推進の中核的指導者となる人材を育成し、道徳教育の一層の充実に資することをねらいに、県との共催で行われました。

前半は、教科化のための基礎的な知識と、道徳教育推進教師の果たすべき役割についての講義の後、実践発表として江名小･赤井中の年間指導計画･別葉の作成例や、一人一役の研究体制づくり、体験活動と道徳教育を関連させた取組などの紹介がありました。

後半には、道徳科の指導と評価の一体化の視点から県教育庁義務教育課藤原指導主事より、「ふくしまの授業スタンダード」に沿って、発問や板書の例を交えながら説明がありました。その後、指導要録や通知表の評価の書き方について具体的な演習を参加者全員で行い、改めて授業の改善・充実の重要性を確認しました。

2　受講者の感想から

受講者からは「授業では、目標である『自己を見つめ直す』『多面的・多角的な考え』を意識した学習活動・発問・ワークシートを考えていきたいと思う」「全職員が主体的な参画意識をもってそれぞれの役割を担うとともに、指導力向上を目指し互いの授業を見合うなど、学校全体で取り組んでいきたい」「全職員の共通理解が絶対必要であると痛感した」などの感想が寄せられました。

3　研修の成果及び今後の取組

次年度からは中学校でも道徳の教科化がスタートします。従来の道徳との違いや授業改善、評価の在り方について、現職教育研修の時間などを使って学校全体で共通理解を図りながら、計画的に進めることが大切になってきます。

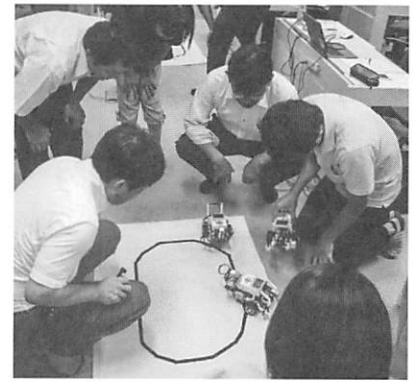
プログラミング教育講座
総合教育センターPC室

1　必修化の背景

2020年度から、小学校ではプログラミング教育が必修化されます。その理由としては、世の中を動かす仕組みの一つであるコンピュータを理解し、上手に活用することが重要になってきたことと、これからの社会に対応する力としてプログラミング的思考を育成することが望まれていることが挙げられます。プログラミング的思考は、新学習指導要領の中の「情報活用能力」の一つとして教科等横断的に育成する必要があります。また各教科の年間指導計画に組み込んだり、必要な環境を整えたりしなければならないので、各学校で計画的に準備を進めることが必要となります。

2　研修の実際

講座では小学校においてプログラミング教育をどのように位置づけ、授業の中でどのように育成していくか、実際に先生方がロボットを使ったプログラミングを体験しながら理解を深めました。算数科のいくつかの場面を想定したプログラミングの演習では二人一組で協力して課題解決しようと、夢中になって取り組む姿が見られました。



3　受講者の感想から

「子ども達に問題を順序立てて考えさせるような、普段の授業でも役立てられる部分もあり勉強になった」「今後の方向性が見え、非常に参考になった。まず何から取り組めばよいのか示していただけたので、すぐにでも取り組んでいきたい」「どの教科のどんな力をつけさせるためにどの場面で活用するのが望ましいのか、などを考えていくのが大切だと分かった」などの感想が見られました。

視点C Care　児童理解と対応の充実

不登校対策
～チャレンジホームの活動を通して～

チャレンジホーム（適応指導教室）は、「いわき市内の小・中学校に在籍する児童生徒で、不登校の状態にあり、本人、保護者が入級を希望する者」を対象とし、学校への復帰を支援することを目的としています。現在60名近くの児童生徒が通級しています。

1　きめ細やかな支援を目指して

平・小名浜・磐崎・植田の４か所にホームが設置され、それぞれの指導員の持ち味や教室周辺の環境を活かしながら、各教室ごとに工夫して教育を行っています。通級場所は、本人が見学して自分に合った教室を選べるようにしています。

通級する児童生徒は、いろいろな要因から不登校になり、心に傷を負っています。成功体験をさせたり、教育センター内のカウンセラーと連携しカウンセリングをしたりすることで、少しでも自信をもたせられるように支援しています。カウンセラーが各教室に訪問して行うコラージュ療法では制作を通して、自分の生い立ちや悩みを自然に話し始める場面が見られました。

2　学校との連携を通して

チャレンジホームの指導員が学校を訪問したり担任の先生方にホームへおいでいただいたりして行う教育相談は、児童生徒を理解する上でとても貴重な時間です。これからも学級担任や保護者との教育相談を定期的に実施し、情報交換や共有化を通して、児童生徒のさらなる理解に努めたいと思います。

3　通級児童生徒の声

・チャレンジホームに来て、１年が過ぎ、友達ができました。もっと増やしていきたいと思っています。学習も自分のペースでできています。

・ここは勉強するところであることや、友達と交流を図る場所であることも分かっています。でも私は、いろいろあってここに来ているので、みんなと遊んだり、話したり、関わったりすることがまだできません。でも、チャレンジホームがあって本当によかったと思っています。

・合同行事では、声をかけてくれる友達がいて、一緒に見学をすることができました。友達ができない私なので、とても嬉しかったです。

特別支援学校参観講座
県立いわき支援学校

1　研修の実際

特別支援教育に関する研修は年々受講希望が多くなってきています。本研修もその一つで、

① 地域における特別支援学校のセンター的機能の理解を図ること

② コーディネーターの役割や指導法、指導計画作成等の専門的理解を深めること

③ 教職員としての資質の向上を図ること

をねらいに実施しました。その中でも特に特別支援学校の授業を参観できるのが大きな特徴です。

今回は、中学部１年で国語「図鑑を作ろう」、高等部３年で職業「後期産業現場等における実習に向けて～ナビゲーションブックを作ろう～」の授業を参観しました。実態に応じた学習形態や指導方法、支援の在り方等、受講者は多くのことを学ぶことができました。

また、インクルーシブ教育推進センターから柳澤亜希子先生をお迎えし、「個に応じた学習指導の進め方と教材・教具の工夫」をテーマに講演していただきました。

当日は、県教育庁いわき教育事務所指導主事による講義、当センター教育支援室指導主事による協議・演習も行い、個別の教育支援計画の活用やこれまでの実践での悩み等を話し合う場もありました。

2　受講者の感想から

・多数の具体例を示していただき、特別支援学校の生徒だけでなく、通常学級でも子どもたちへの関わりに生かせることが多く、深い学びを得ることができた。

・支援学校の先生方はどこの教室（授業）でも笑顔が多く、これこそ大事なことであると再認識した。

・個別の指導計画の資料の指導内容例が分かりやすく、具体的な指導のイメージをもつことができた。

・講演会では、障がいの特性からくる困難さに応じた目標設定、内容精選の必要性について具体的に理解することができた。

いわきっ子入学支援(保幼小連携)システムの充実に向けて

「いわきっ子入学支援（保幼小連携）システム」は、一貫性のある切れ目のない支援の実現に向けて、何らかの配慮を必要とする子どもたちに対する情報を入学前の学校に伝達し、連携する手段や機会を得ること、また、学校側の支援力を充実させることを目的として、平成29年度小学校入学生からスタートしました。

主な取組は３つです。

1　入学支援シート

「入学支援シート」は、入学前の子どもたちの成長や発達の歩み、指導・配慮等の工夫を、保護者と保育園・幼稚園、療育機関等が一緒にまとめ、入学する学校へ伝達するためのシートです。就学時健康診断の際に全ての保護者に配付し、入学説明会までに任意で提出していただく流れとなっています。特徴として、

・家庭生活、集団生活、療育場面など多面的な情報の共有化ができる。
・入学後の支援体制づくりに向けた資料となる。

などがあげられます。

2　入学支援会議

「入学支援会議」は、「入学支援シート」の情報を受け、保護者や保育園・幼稚園等と一緒に、その子どもたちに対する支援や配慮について検討する必要があると学校が判断した場合に開催されるケース会議です。特徴として、

・具体的な支援についての、情報交換や共通理解を図ることで連携が深まる。
・「個別の教育支援計画」、「合理的配慮」についての合意形成を図ることができる。

などがあげられます。

3　サポートプログラム

「サポートプログラム」は、主に第１学年担任に対して、「子どもの理解と対応を促進するためのサポートプログラム」を実施することにより、何らかの配慮を必要とする子どもたちへの支援力を高め、よりよい環境作りを目指す取組です。「合理的配慮を提供するための15のポイント」をもとに、１コース年４回程度で実施するプログラムとなります。特徴として、

・学級に在籍する全ての子どもたちにとって有効な手立てを体験できる。
・担任教師の支援力アップにつながる。

などがあげられます。

〈今年度の実施状況〉

今年度の実施状況は以下のとおりです。

①入学支援シートの提出状況
　・596人／2587人（23%）
②入学支援会議の実施状況
　・105件／596件（18%）
③入学支援会議実施校
　・　43校／66校（72%）

自由記述による意見では、

・家庭や関係機関から情報を得ることで、入学後の対応について事前に検討・準備ができた。
・指導・支援が必要な児童を把握し、クラス編成に役立った。
・家庭と連絡が取り合える関係づくりができた。

など、成果と思われる感想を多数いただきました。しかし、

・支援シートが提出されていない児童に対する支援で苦慮したケースがあった。
・支援会議を開く時間が十分に確保できない。

など、課題と思われる意見もありました。

また、保護者や保育園・幼稚園からも、

・支援シートを提出したけれど、学校からのフィードバックがなかった。

という意見もいただきました。

〈さらなる充実に向けて〉

現在、教育支援室では、

① 入学支援システムの有用性に関する理解啓発
② さらなる情報収集を通した現状理解と効果的な運用方法に向けた改善策の検討を進めています。

学校側におきましても、理解啓発や情報招集にご協力いただくとともに、

① 提出された「入学支援シート」の情報に関する校内での共有化
② 「入学支援シート」を提出した保護者や保育園・幼稚園等に対するフィードバック
③ 特別支援教育に関する理解啓発と教員の指導力向上に向けた「サポートプログラム」の活用について前向きに検討くださいますよう、お願いいたします。

ひろば ～平成31年度 総合教育センターの取組～

〈平成31年度研修調査室の重点〉

研修調査室では平成31年度に向けて、学校現場が抱える多忙化の負担軽減と研修内容の充実と改善を図るため、「改革」をテーマとして研修講座全体の見直しを行ってきました。その概要は以下の通りです。

(1) 平成29年度に策定された福島県の教職員指標に基づく体系的かつ効果的な教員研修が実施できるように、各ステージに見合った研修体系の見直しを図ること。
　・中堅教員（11年目～21年目）に関する研修を校内研修と関連を図る工夫　等

(2) 新学習指導要領完全実施に向けた研修の充実を図ること。
　・「主体的・対話的で深い学び」の授業研修の重点化
　・道徳科や小学校外国語活動、プログラミング教育に関する研修の実施

(3) 研修講座の精選を図ること。
　・削減する研修等（6）
　・１日から半日にする研修等（9）
　・隔年開催にする研修等（11）
　・新設する研修等（4）

(4) 研修方法を工夫すること。
　・参加型、体験型、問題解決型研修の拡充

(5) 教職員免許状更新講習を開設し、市内教員の負担軽減を図ること。
　・平成31年度13講座開設（夏季休業中）

また、研修以外では調査研究委員会による実践的研究を行っています。本年度も「教師力upの素」動画の編集を行い、その成果を来年度の実践研究発表大会で報告する予定です。

さらに、総合教育センター専用の共有フォルダ（Kドライブ）を活用し、資料や様式等の利便性を図るとともに「教師力upの素」動画のセキュリティ強化を図っていきます。

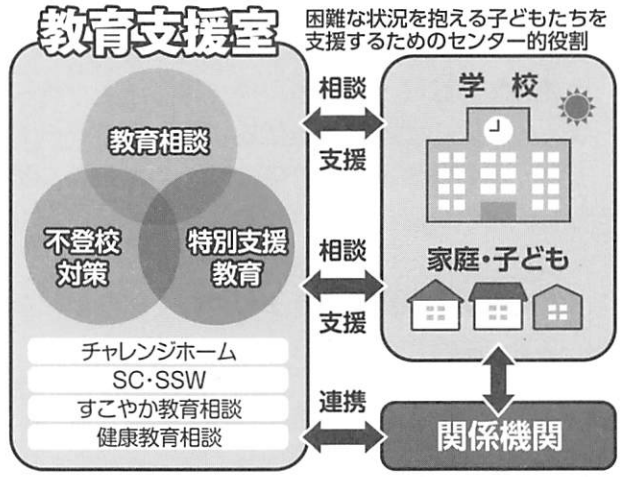
最後に、文化センターの耐震工事に伴い、５階総合教育センター各室の使用が９月頃まで制限され、今まで文化センターで行っていた研修や各種団体への貸出ができなくなりました。研修会場等の確認をよろしくお願いします。

〈平成31年度 教育支援室の重点〉

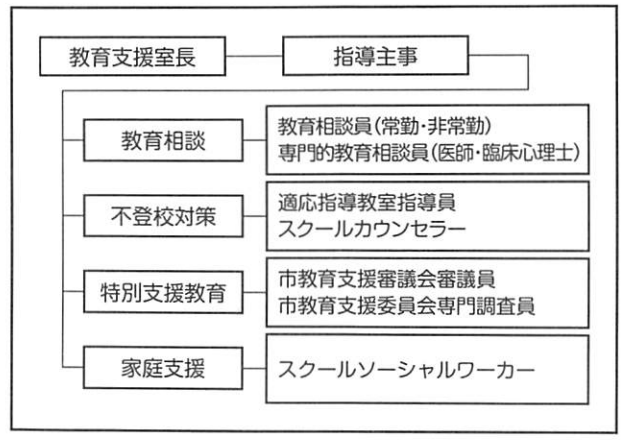
教育支援室では、今年度同様、「困難な状況を抱える子どもたちを支援するためのセンター的役割」を担うために、

① 教育相談に関すること
② 不登校・引きこもりに関すること
③ 特別支援教育に関すること
④ 家庭支援に関すること

に取り組んでいきます。



11月に行ったアンケートの結果から、学校は、「児童生徒が抱える課題に対する支援」「保護者と連携した取組に関する支援」「カウンセリング等、専門的な教育相談の実施」を教育支援室に求めていることが分かりました。

その願いを実現していくためにも、組織を生かしながら、互いに連携し合い、チームとして支援にあたっていきます。

お気軽にご相談ください。